

右衛門大夫殿御返事

弘安二年一二月三日 五八歳

抑 ^{そもそも} 久しく申し承らず候の処に御文到来候ひ畢んぬ。殊にあをきうらの小袖 ^{青 裏} 一、
ぼうし ^{帽 子 ひとつ} 一、をび ^帯 一ず、鷺目 ^{がもく} 一貫文、くり ^{栗 ひとつ} 一籠たしかにうけとりまいらせ候。

当今は末法の始めの五百年に当たりて候。かゝる時刻に上行菩薩御出現あつて、南無妙法蓮華經の五字を日本国の一切衆生にさづけ給ふべきよし經文分明 ^{ふんみょう} なり。又流罪死罪に行なはるべきよし明らかなり。日蓮は上行菩薩の御使ひにも似たり、此の法門を弘むる故に。神力品に云はく「日月の光明 ^よ の能く諸の幽冥 ^{ゆうみょう} を除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」等云云。此の經文に斯人行 ^{しにんぎょう} 世間の五 ^{いつつ} の文字の中の人の文字をば誰とか思 ^{おぼ} し食 ^め す、上行菩薩の再誕の人なるべしと覚えたり。經に云はく「我が滅度の後に於て ^{まさ} 應に斯の經を受持すべし、是の人仏道に於て ^{けつじょう} 決定して疑ひ有ること無けん」云云。貴辺も上行菩薩の化儀をたすくる人なるべし。

十二月三日

日 蓮 花 押

右衛門大夫殿御返事